

中小都市河川の再生と住民意識

九州大学大学院 学生員○内山裕三 九州大学工学部 正 員 小松利光
九州大学大学院 学生員 山本賢一 宮崎大学工学部 正 員 杉尾 哲

1. 緒言

近年、各地で下水道整備や良質な水の導水などによって都市小河川の水質が改善され、親水施設として整備される例がふえている。このような整備や親水施設に対して周辺住民の評価を明らかにすることに加え、その評価に影響を与える要因を探ることは重要である。

本研究では、大河川（一級河川）に隣接した都市小河川を対象として、その河道改修案に対しどのような住民意識が反映されるかを調べ、そこから、水辺の評価に対する影響要因を探ることとする。

2. 対象河川と調査の概要

調査対象河川は、福岡県久留米市の池町川と宮崎県宮崎市の小松川である。両河川とも都市の市街地を貫流し、九州第一、第二の流域面積を持つ筑後川と大淀川という大河川にそれぞれ隣接するという地理的共通点を持つ。また両河川とも、元来の固有流量の少なさに加え、周辺の都市化にともなう雑排水流入の増加により、近年水質がかなり悪化しドブ川と化していた。そのため、池町川は筑後川から、小松川は大淀川から、それぞれポンプ導水による水質浄化が図られた。

調査は、池町川では水源付近から河口近くまでの長さ約4km、幅約1.5kmの範囲にわたり（H1.1.10～15実施）、小松川では水源付近から河口までの長さ約5km、幅約0.5kmの範囲にわたって（H1.10.9～11実施）それぞれ成人を対象にアンケート調査を行った。図-1(A)(B)に各調査区域を、表-2に調査票の内容を示す。

3. 分析結果

図-2で示すような改修案の選択に際し、住民のどのような意識が影響を与えているのかを検討するためにクラスター分析を行った。調査票の全てのアイテムを変数としてクラスター分析（ワード法）を行い、＜河道改修案＞から距離の大きい変数を逐次除いていき、＜河道改修案＞と関連性の比較的高い変数を抽出した。その結果、池町川においては、＜魚の放流についての意見＞＜近づきやすさに対する将来の期待＞＜庶民性＞＜魚の有無＞が、小松川においては＜大淀川との親しみの比較＞＜季節感の有無＞＜自然性＞＜川の起伏の有無＞などが抽出された。

小松川周辺住民の河道案に対する選択要因が抽象的な段階にとどまっているのに比べ、池町川周辺の住民は、川との触れあいにまで踏み込んで判断をしている事がわかる。これは、池町川においては、導水事業に並行して、下水道が整備された（普及率 98%）後川沿いに緑道が整備され、鯉なども放流されており、さらに周辺の公園とも一体となって住民の憩いの場となっていることに対して、小松川は、導水が行われたものの下水道の整備もまだ不完全で（普及率 64.8%）、河川周辺の整備もされていないということが主な原因と考えられる。即ち、河川や河川周辺の具体的な整備の有無によって現在住民に利用されているかいないかという事が大きく影響してい

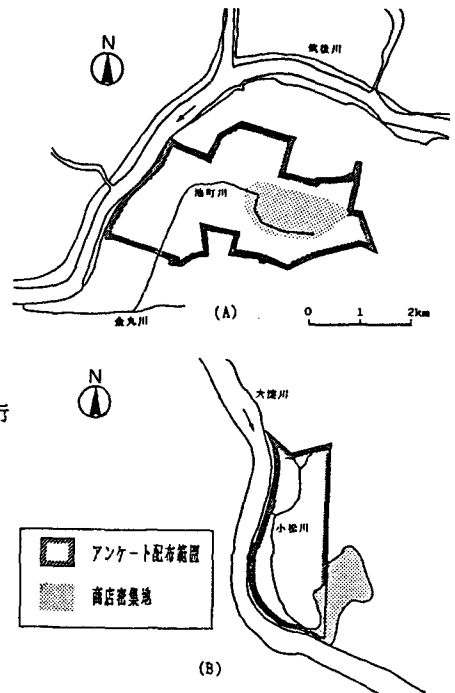


図-1 河川の位置と調査区域の概要

表-1 調査表の内容

A	回答者属性
B	現状に対する評価
C	現在のイメージ
D	将来に関する希望
E	将来における親水のための河道改修案

と考えられる。さらに、小松川において、＜大淀川との親しみの比較＞が関連の強い項目として抽出されたことから、小河川に対する評価が抽象的な段階にとどまる場合、近接する大河川のイメージが大きく影響することが分かる。

＜河道改修案＞と強い関連性の見られた項目に属する各カテゴリー間の関係を具体的に調べるために、数量化Ⅲ類による分析をつぎに行った。結果を図-3 ① ②に示す。図中の囲みは第5次元までの解（累積寄与率：池町川77.3%、小松川77.1%）をもとに、再度クラスター分析により分類したものである。なお池町川については、大河川の影響を見るために＜筑後川との親しみの比較＞の項目を付け加えた。

前述の分析で小松川において強い関連性の見られた、＜大淀川との親しみの比較＞と＜河道改修案＞の関係を注目してみると、小松川に親しみをを感じる人は＜現状優先で今の断面＞を選ぶ傾向にあり、大淀川に親しみをを感じる人は＜利用優先で人工化＞の案を選ぶ傾向にある事がわかる。小松川との比較のため＜筑後川との親しみの比較＞の項目を加えた池町川においても同様な傾向が見られる。

池町川・小松川に親しみを持つ人々は、共に現状に即した河川を望んでいる。それに反して、大淀川・筑後川に親しみを持つ人々は、共に今の池町川・小松川の状態よりも更に改修の加えられた状態を望んでいる。

4. 結論

今回の分析により以下の事が明らかとなった。

都市小河川においては河川周辺の整備の有無によって水辺の評価に差異がある。即ち、周辺整備が行われている場合は、具体的な整備内容に踏み込んで人々の評価が行われているのに対し、周辺整備が行われていない河川においては、抽象的な段階で人々はその河川を評価している。その際、隣接する大河川のイメージが小河川に対する評価に影響を与えている。次に、小河川への関心の深さにより、人々が小河川に対して要求する機能に明確な差が表れる。また、小河川に対して関心の低い人達は、川の現状にあまりこだわらず、より利用性の高い機能的な姿を小河川に求める。

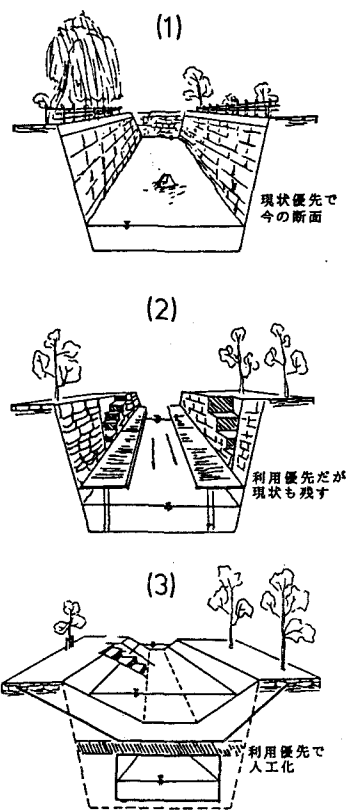


図-2 河道改修案

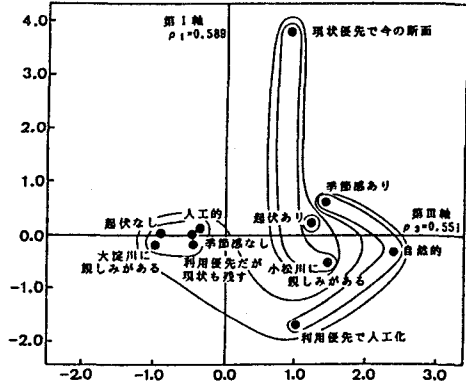


図-3 数量化Ⅲ類の結果 ①

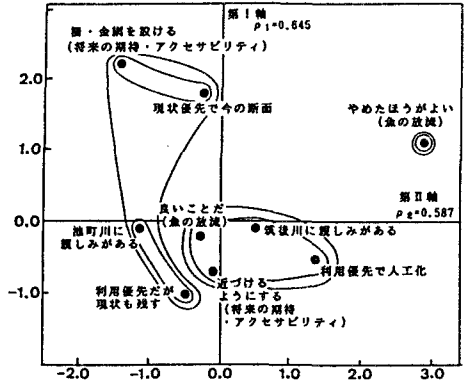


図-3 数量化Ⅲ類の結果 ②